

未来を表すフランス語現在形¹

「その場性」の有無を中心に

Le présent « pro futuro » et l'absence d'actualité

岸 彩子

KISHI Ayako

Cet article a pour objet de mettre en évidence la nature « non perceptive » du présent « pro futuro » (ppf). En nous appuyant sur la notion de « domain of discourse » (Recanati 1996), nous distinguons deux domaines ; l'un, limité à une perspective spatio-temporelle, conduit à interpréter l'énoncé au présent comme le reportage de ce qui est perçu par le locuteur, l'autre, qui est déterminé par le thème et qui n'est pas limité temporellement, exprime non pas une perception mais un savoir, ce qui est le cas du ppf.

1. はじめに

1-1. présent « pro futuro »

フランス語の直説法現在形（以下現在形）は、発話現在時 t_0 を含む時間、あるいは t_0 に隣接する時間の事行²だけではなく、 t_0 から切り離された過去時³や未来時の事行を表すことがある。

(1) Mon avocat vient à cinq heures. (Aymé cité dans Klum 1961)

(My lawyer comes at 5 o'clock.)⁴

(2) Je suis à Bruxelles le 7. (I am in Brussels on 7th.)

Le Goffic et Lab (2001) に倣い、例1-2のような、未来に生起する事行を表す現在形の用法を、présent « pro futuro » を略して ppf と呼ぶことにする。本稿では、この ppf について、話者がど

のような情報として事行を表しているかという観点から考察する。本稿の扱う主な疑問点は、**ppf**がどのような仕組みで未来の事行を表しているのか、未来形とはどの点で異なるのかである。

1-2. フランス語現在形の意味を巡る3つの説

ppfについて考えるには、まず現在形自体の意味を考えなければならない。フランス語現在形の意味に関する説明は、大きく「現在時説」、「同時性説」、「非時間性説」の3つに分けられる⁵。

現在時説は、現在形は発話現在時 t_0 、またはそれを含む時間を表すとするものである。このアプローチはもっとも古典的なものと言えるだろう。この説では、過去時を表す現在形とともに **ppf** も例外的用法とされ、それ以上の説明はなされない。

2つ目の考え方は、現在形は「話者にとっての現在時」を表すとする同時性説である。語りの現在のような過去時を表す用法は、現在時説では例外とされていたが、この考え方では説明が可能になる。次の例では、登場人物である父と私が歩いている、物語中の一時点に視点を置き、そこを話者にとっての現在と考えるわけである。

(3) Mon père et moi, nous *marchons* côte à côte, sans dire un mot, jusqu'au quai des Chartons où *habitent* (...) les Pessac (...).

(Modiano *Les boulevards de ceinture*)

(My father and I walk side by side, without saying a word, as far as the Quai des Chartons where the Pessacs live...)

3つ目は、現在形の形態自体には時間的な意味はないとする非時間性説である。この説では、現在形に、現在性も含めてどのような時間性も認めない。現在形がある時間の事行を表すことができるのは、文脈による助けがあるためで、発話現在時 t_0 の事行を表す場合も、この t_0 が支えになっているとする。例4では **Tiens** で注意喚起される時点が支えとなり、 t_0 の事行と解釈される。

(4) Tiens, il vient. (Hey, he comes. = Here he comes.)

1-3. 問題提起

上で見た説明は **ppf** にも適用される。現在時説では等閑視されるが、同時性説でも、また非時間性説でも、**ppf** は説明可能なように思われる。同時性説では、例1であれば5時の時点、例2では7日の、未来の時点に話者の視点を置いて述べたものという説明が可能であろう。非時間性説

であれば、そもそもどのような時間性も持たない形なのであるから、現在形が未来の事行を表すことにも問題がないということになるであろう。

しかし、次に挙げる例は、どちらの考え方でも説明できないように見える。

(5) Demain midi, je {serai /* suis} à Bruxelles *depuis* deux heures.

(Tomorrow noon, I {will be / am} in Brussels since two o'clock.)

(6) Demain à cette heure-ci, je {serai /* suis} *en train de finir* mon devoir.

(Tomorrow at that time, I {will be / am} finishing my homework.)

このように depuis 「～から」や、être en train de 「～しているところ」を含むと、ppf としては成立しない。また、il y a...que 「～前」や ça fait...que 「～になる」も ppf 中には生起しない。

(7) *Demain midi, { il y a / ça fait } deux heures que je *suis* à Bruxelles.

(Tomorrow, {there is / it takes} two hours since I am in Brussels.)

同時性説に従えば、事行 [je-être à Bruxelles] の生起時点に、話者の視点を置けば現在形の使用が可能なのはである。また非時間性説では、現在形はどのような時間区分とも矛盾をきたさないはずであり、これに従えばどのような時間表現とも現在形は共起可能であると予測される。これらの表現とも共起可能なのはである。ところが、実際にはこれらの表現は ppf と共起しない。なぜ depuis などの表現と ppf は共起しないのか。

このことはまた、未来形と異なる点はどこかという問題でもある。上記の各表現は未来形とは共起可能である。したがって、共起を阻んでいるのは、未来という時間的意味ではなく、現在形が未来を表すということ、すなわち ppf であるということになる。ppf の未来形と異なるどのような性質が、これらの表現との共起を妨げているのか。ppf はどのような条件下に成立するのか。

2. 先行研究とその問題点

ppf に関する先行研究としては Touratier (1996) と Le Goffic et Lab (2001) が挙げられる。

2-1. Touratier(1996)

Touratier(1996)によれば、ppfが成立するか否かの基準は特定性にある。彼の説明は次のようなものである。現在形は時間性を持たないのでどの時間のことも表すことができ、したがって未来の事行も問題なく表せる。どの時間に位置づけられるかは、言語文脈もしくは発話の状況で決定され、未来の事行を指す場合(=ppf)には、その時点が特定されていなければならない。

この特定性が、ppfと未来形の違いであるということになる。次の例8で見てみよう。

- (8) Dès que j'aurai des nouvelles de lui, je vous { informerai / informe }.
(As soon as I will get(=get) news about him, I {will tell / tell} you.)

未来形に置かれた時間節は「いつかは分からないが彼についてのことが分かった時には」という意味になる。この時間節に現在形の主節が組み合わされると、不特定な時間に特定の事行が結び付けられ「いつかは分からないが彼についてのことが分かった時にはいつでも」という意味になる。主節を未来形に置くと、知らせるのがいつなのかは不特定で、より不確実な言説になる。

この説明は直観に沿うものでもあり、一見説得的であるように思えるが、次の例でなぜ現在形が容認されないのかが説明できない。この例では未来の時点は「いつでもよいいつか」ではなく、「明日の午前中、正午近く」と細かく設定された特定の時点である。

- (9) Venez admirer ça. Je vous attends, votre femme et vous, demain matin, vers midi. Je vous {offrirai /* offre} un cocktail que je {fabriquerai /* fabrique} moi-même.
(Come to admire that. I wait for you, your wife and you, tomorrow morning, about noon. I {will give / give} you a cocktail that I {will make / make} by myself.)

この説明は、我々の疑問である「なぜ depuis などの表現と ppf は共起しないのか」にも答えることができない。例5-7では、未来の特定の時点が示されているが、ppf としては成立しない。

2-2. Le Goffic et Lab(2001)

Le Goffic et Lab(2001)は、ppfは確実な事実を前もって確認するという意味を持ち、その成立の基準は予定可能(programmable)であることとする。

彼らは、この説で特定性では説明できなかった未来形との違いを説明できるとしている。次の

例では以前からの予定として組み込まれている「明日、警視總監と昼食を食べる」には ppf が用いられ、「それがあなたの手に入る」という約束には「ちょうどの時間」と特定されていても未来形が用いられている。

(10) Je vous promets de m'en occuper, vous l'aurez à temps pour la reprise des Danicheff, je déjeune justement demain avec le Préfet de police à l'Elysée.

(Proust ; cité dans Klum 1961; 233)

(I'll see to that, all right. You will have it in time for the Danicheff revival. I lunch with the Perfect of Police tomorrow, as it happens, at the Elysée.)

だが、この説明でも我々の疑問に答えることはできない。例5-7は、非明示的には、約束を含意するかもしれないが、そうである必要は全くない。

Touratier の主張する特定性でも、また Le Goffic らの確実性・予定性でも、ppf が depuis などの表現と共に起不可能な理由は十全には説明できない。本稿は、基本的には非時間性説の立場から、上に挙げた ppf の問題を解くことを試みる。非時間性説を採るのは、現在形の用法には、話者の視点が置かれる時点の事行を表すという同時性説の立場から説明可能なものも多いが、話者の視点が置かれているとは言えない用法もまた存在するからである。ppf もこのような用法のひとつである。本稿では、非時間性説に「領域」という概念を導入することで、非時間性説でしばしば言われる「文脈の助け」がどのようなものであるかということを明らかにしようとする。このことは現在形の各用法の統一的な説明に利すると考える。

以下では、上のような考えに基づき、ppf が、事行の生起時点に視点を置いた知覚情報ではなく、その事行が存在するということのみを知識情報として述べたものであることを見ていく。

3. フランス語現在形とその領域

3-1. 領域

非時間性説を採る場合、まず問題になるのが、時間性の無い形がどのようにして特定の時間、あるいは非時間の事行を表せるのかということだろう。本節では、まず、現在を表す現在形についてこのメカニズムを考える。

現在形が発話時 t_0 を含む時間、即ち現在の事行を表す場合、しばしば2つの解釈が可能である。

- (11) Paul fume. (Paul is smoking. / Paul smokes.)
- (12) Un chien aboie. (A dog is barking. / A dog barks.)
- (13) Il vient. (Here he comes. / He comes here (habitually))

これらの文はどれも、単独では、発話現在読み、属性付与文のどちらとも決定されない。ポールが今たばこを吸っているのか、喫煙者であるのか。犬が今吠えているのか、犬一般について吠えるものであると述べているのか。彼は今こちらに来ているのか、それとも習慣を述べているのか。

だが、多くの場合、これらはどちらかの意味に正しく解釈される。発話に先立って、話者と聞き手の間で、解釈時に考慮に入れるべき範囲が了解されているからである。この範囲が決まれば、解釈も一つに決定される。この範囲を領域と呼ぶことにする。これは Recanati (1996) で「解釈の領域」domain of discourse と呼ばれているものと、また Cannings (1978) で「関連領域」domain of relevance と呼ばれているものと、同様のものである。文内容が真または偽とされるとき、常に全世界・全時間の情報を鑑みて判断されるわけではない。真偽決定に必要なのは、時間的・空間的にずっと狭い範囲で得られる情報のみである。話者と聞き手がいる「今ここ」の状況で犬が吠えているのが聞こえていれば、例12は真となる。この解釈の場合には、世界中の犬の情報や、今までやこれから犬が吠えるかどうかなどの情報は必要ない。

このように、領域と照らし合わせて解釈されることで、現在形は時間性を持たなくとも、「今ここ」のような、特定の時間の事行を表すことが可能になると考えることができる。時間性は、現在形の形態ではなく、領域にあるとするわけである。

3-2. 現在形の2つの領域

「犬が吠えている」のような解釈の場合、領域は「今ここ」である。このように、発話状況と呼ばれる時間・空間的範囲を、現在形の領域のひとつと考えることができる。この領域は話者の知覚が可能な範囲で限定されている。上の例11-13がそれぞれ「ポールが、今ここでたばこを吸っている」、「犬が一匹、吠えている」、「彼が今ここに来る」のように解釈されるのは、話者が各々の事行を知覚しているときであって、ポールがたばこを吸っているのが見えないときや、または犬の吠え声が聞こえないときには、これらは「今ここ」のことを表すものとしては不適當になる。この、話者の知覚が限定する領域のような、一時空に限定された領域を、**t** 領域と呼ぶことにする。**t** 領域で解釈される現在形は、この領域が話者―聞き手間で了解されていることが支えとなって、特定の時空 (ex. 「今ここ」) の事行を表す。この時間的・空間的範囲が、話者―聞き手間

で共有されていない時には、両者の間でその範囲のすり合わせが行われ修正される。

- (14) A- Tiens, il vient ! (Look, he comes.)
 B- Où ? je ne le vois pas...(Where? I cannot see him...)
 A- Un peu plus loin, à gauche.(A little bit further, to the left.)

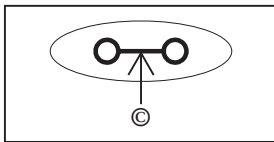
いわゆる語りの現在も、t 領域で解釈される現在形のひとつである。この場合には、領域は、話者の実際の知覚で区切られるわけではない。しかし、物語世界内のある一時空でその場の状況を見ているような主体が想定され、この主体の知覚の範囲で t 領域が限定される。

- (15) Ma mère est épuisée par le long effort. Elle se tait bouche entrouverte, sa poitrine se soulève à chaque respiration [...] (Philippe *Je l'écoute respirer*)
 (My mother is tired by the long effort. She falls silent with the mouth semi-open, her chest rises with every breath.)

例15では、「呼吸のたびに毎回」は、その場で母を見ている je「私」の知覚している時間の範囲内で「毎回」ということで、それ以前、または以降の時間のことは考慮には入れられていない。

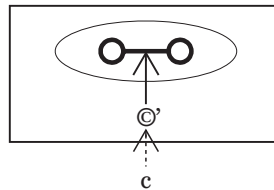
話者が実際に知覚する範囲を領域とする場合を図1のように、知覚主体を想定する場合を図2のように示すことができる。事行は太線の図形で示される。楕円は言語化される部分、四角は文が伝達する意味を表す。◎は事行を知覚している話者、◎'は想定される知覚主体を示すが、これらの知覚者がいることが、文の意味に含まれている。

図1



(14) « Tiens, il vient ! »

図2



(15) « Elle se tait bouche entrouverte... »

ある主体の知覚の範囲で t 領域が限られ、現在形はその主体が知覚する事行を表す。この場合には、知覚主体の存在または想定が不可欠である。また、t 領域は一時空のみに限定される。実際に生身の人間が存在し、知覚可能なのは一時空の範囲内のみだからである。

さて、現在形の解釈の領域として可能なのは、このような知覚の範囲ばかりではない。例11-13には、前段で見た解釈の他に、「ポールは喫煙者だ」、「犬というものは吠えるものだ」、「彼はここに来る習慣がある」という解釈も可能である。このような場合は、先に見た解釈のように、予め発話当事者が「今ここ」のような特定の時空を了解し共有していなくとも、解釈可能である。だが、この場合にも、勿論、文は全世界・全時間の情報に鑑みて真偽判断されるわけではない。

この解釈が取られるとき考慮に入れるべき範囲は、一時空には限定されていないが、それぞれ「ポールという人物」、「犬という動物一般」、「当該の人物」のような、文のテーマが限定していると考えられる。現在形の文 *Paul fume.* が「ポールは喫煙者だ」という解釈を受けるときには、聞き手はこの文が話者がポールについて何ごとかを述べる文であること、すなわち文のテーマが「ポール」であることを了解している。またこのとき、ポールの存在する時間全体、もしくは「数年前から今まで」のような、ある程度の幅を持った時間でのポールの喫煙習慣の有無が問題になる。この場合、実際の事行「ポールの喫煙」が実現する個々の時間・空間は重要ではない。今、または他の一時点でポールがたばこを吸っていないなくとも、この文は真のままである。個々の時点の差が捨象されているわけで、この点で、先に見た *t* 領域での解釈の場合と大きく異なっている。*t* 領域で解釈された場合には、その領域を限る一時空 (ex. 「今ここ」) のみで事行が成立し、この時空と他の時空の差は決定的である。このような一時点に限定されない、「ポールは喫煙者だ」のような解釈を受ける現在形の領域を、非 *t* 領域と呼ぶことにする。非 *t* 領域を限定するテーマは、一文に限ったものである必要はなく、複数の文を統べる大テーマであることもある。(「ポールのことを皆心配している。彼は働き過ぎだし、スモーカーだ」*On s'inquiète pour Paul. Il travaille trop et il fume.*)

現在形は、この2つの異なる領域で解釈されることによって、同じ形態でも異なる解釈を受けることになる。これまでに見た現在形と領域との関係を整理すると次のようになる。話者、またはそれに代わる主体の知覚可能な時間的・空間的範囲に領域が限られた場合には、その一時空の事行を表すことになる(発話状況の現在、語りの現在)。文のテーマ、あるいは複数の文にまたがる大テーマで非 *t* 領域が限定された場合には、一時空には限定されない事行を表す文となり、そのテーマについて何ごとかを述べる。前者の場合は知覚主体の存在が必須であり、この領域で解釈される現在形はその主体による知覚を表す。これに対して、後者は知識を表す文である。

3-3. 知覚情報 / 知識情報

Vogeleer (1994) では、話者がどのような情報として表したものかによって、文を2種に分けて

いる。1つは知覚情報を表す文で、もう1つは知識情報を表す文である。Vogeleer の視点関係 *relation point de vue* では、知覚情報は下記の a のように、知覚情報は b のように表される。

- (16) a. VOIT(I_{pv}, e) e は文が描出する出来事
 b. SAIT(I_{pv}, p) p は文内容が表す命題

a の式の VOIT は、知覚に基づく抽象的な2項関数で、視点の主体 *individual-point de vue* (I_{pv} と略される) と出来事 e という項を取る意味関数であり、視点の持ち主 I_{pv} が実際に見ることによって得た情報を、文が表していることを示している。この場合、I_{pv} は本稿の知覚主体に当たる。上記の「ポールが今ここでたばこを吸っている」と読まれる現在形はこの述べ方に当たる。

b の SAIT は、知識に基づく2項関数で、知識の持ち主 I_{pv} と命題内容 p という項を取り、文が、文内容を p とすると「I_{pv} が p であることを知っている」という、知識情報を表すものであることを示している。「ポールは喫煙者だ」と解釈される現在形はこの述べ方に当たる。

Vogeleer の式の中では、VOIT「見る」、SAIT「知る」が項にそれぞれ出来事 e、命題内容 p を取っている。これは、次のことを反映しているものと考えられる。事行の実際の展開、すなわち出来事を「見る」ことはできても「知る」ことはできない。「出来事がある」ということは知ることができるが、それはもはや命題であり、出来事そのものではない。また、反対に「p である」という命題を「見る」ことはできない。命題内容を具現化した一事例を見ることはできるかもしれないが、それは部分的な現れに過ぎず、全体としての命題自体を知覚するということはできない。「見る」対象と、「知る」対象は、このように異なる。また、「見る」ことは一時空でのみ行われ得、この情報へのアクセスは時間の束縛を受けるが、これに対し「知っている」情報は記憶の中に格納されているため、いつでも取り出して参照することができるという違いもある。

この知覚と知識の差異は、本稿の t 領域／非 t 領域の対立に重なる。文は、t 領域で解釈されれば知覚情報を表すものとなり、非 t 領域で解釈されれば知識情報を表すものとなる。2つの情報の捉え方を踏まえて、次のような仮説が立てられる。

(17) 仮説：2種類の領域による現在形の2種類の解釈

t 領域： 知覚の一時空で限られる。この領域では、文は直接的な体験に基づく知覚の表現と解釈される。文の表す事行は時間軸上の一点に定位される。

非 t 領域：文が記憶に基づく知識表現と解釈される領域である。一時空で得られるよりも多くの情報を考慮に入れて解釈される。個々の時間の差は捨象される。

この2つの領域は、単に時間的な長さや空間的広さという量的な点で異なるものではなく、質的に異なるものである。t領域で解釈される現在形が表す知覚は、具体的な、生身の人間による実際的な体験であり、状況—主体のインタラクションが可能である。それに対して非t領域での解釈を受けると、現在形は個々の状況に時間的・空間的に束縛されない知識を表す。この領域では複数の事行の比較分析など、抽象的な概念操作が可能である。

4. 知覚情報／知識情報とその場性の有無

4-1. その場性

知覚情報を表す現在形と知識情報を表す現在形の対立は、「その場性」とも呼ぶべき性質の有無に重なる。知覚情報を表す場合、現在形はt領域内、つまり時間的・空間的に狭く限られた知覚の一時空内の情報のみが、考慮に入れて解釈される。したがってその情報は量的にも質的にも限られる。

発話現在読みされる現在形は、話者などの知覚主体を想定して解釈されている。これは、この主体が知覚する、具体的、一回的な特定の状況を想定しているということである。実際の特定の状況に生身の人間が身を置くときには、その主体と状況が互いに影響を及ぼすことが可能になる。知覚の一時空に区切られた範囲で得られる情報は、その主体による体験的なものに限られる。「その場性」は、このように特定の一時空に生身の人間が身を置くことでのみ得られる情報の集合で形成される。

発話現在読みされる現在形と、その場の状況、すなわち発話状況との結びつきが非常に強いことは論を待たない。これと同様にt領域で解釈される語りの現在もその場性を強く有する。このことは、文形態にも様々な形で現れる。

語りの現在には「見ているように語る」という性質があるとされる。次の例は火事の被害者の証言であり、語りの現在の1つである。証言であると明示されていなくとも、読者はその場にいる人を想定し、その人がその場の状況をそのまま語っているものと解釈する。これは「あたり一面」、「目が痛い」といった体感表現、実際の発話「火事だ!」の引用がその場性を強く持つためである。これらは狭く限定されたt領域「その場」でのみ有効なものである。

(18) Il y avait de la fumée partout. Ça pique les yeux. Tout le monde crie « Au feu ! » (There was smoke everywhere. It hurts the eyes. Everyone cries “Fire!”)

これに対して、知識情報の場合には、時間的・空間的な限定は受けない。知識として表される場合には、複数の事行をお互いに関連付けるなど、複数の時点で得られる情報を一度に考慮の範囲に入れることも可能である。この場合には文は非 t 領域で解釈される。

時間軸上にある場合、互いに切り離された2つ以上の時点は任意の一時点 t_0 との時間的位置関係や t_0 からの距離などの点で異なる値を持つ、差のあるものとして捉えられる。この差によって、ある時点 t_x が別のある時点 t_y に先行するまたは後続するものであるというように位置づけられる。時間軸はこのような互いに差のある時点連続で形成される。つまり時間の流れはこの差異によって生み出されていることになる（図3）。そしてそれぞれの時点に生起する事行 x 、 y 、 z が知覚情報として表される場合、それぞれの時点が t 領域となる。だが、非 t 領域では個々の時点の差は捨象され、このような時間の流れはない（図4）。

図3

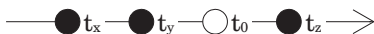
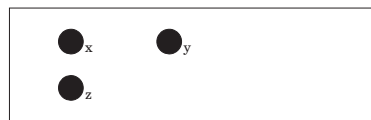


図4



事行は非 t 領域の中に存在する知識情報として等しく扱われる。

この場合、事行は非 t 領域で「 X についてはこのような事行 Y がある」のように解釈される。「 X について」は非 t 領域を限定するテーマである。このテーマに直接関与しない、個々の事行の詳細な状況描写などとは相容れない。細かな情報が、事行が非 t 領域内の成員として他の事行と同列に置かれる段階で、捨象されるからである。次の例19は、上の例がその場での知覚として表していた火事を、記事を書く時点で振り返ってまとめたものである。「大損害を負わせる」は知覚可能な事行ではなく、この文にはその場性はない。知識として表したものである。

(19) Un incendie a ravagé, mercredi 11 avril, un appartement au deuxième étage d'un immeuble de la rue de la Bretonnière.

(On Tuesday 11th April, a fire ravaged an apartment in the second floor of a building in the Street of la Bretonnière.)

4-2. ppf とその場性の表現

フランス語における ppf と同様に、英語においても、単純現在形が未来を表すことがある。このような現在形とある種の様態の副詞とは共起しないことが、樋口(2007)で確認されている。次の例では、a は「宇宙飛行士が戻ってくる」という未来の事行を表す現在形として完全に容認されるが、同じ文に safely 「安全に」を加えた b は容認されない。

- (20) a. The astronauts *return* next Monday.
b. *The astronauts *return safely* next Monday.

フランス語でも同様の現象が確認できる。en sûreté 「安全に」などの副詞と ppf は共起しない。

- (21) a. L'astronaute *revient* sur la Terre lundi prochain.
(The astronauts return next Monday)
b. ?? L'astronaute *revient en sûreté* sur la Terre lundi prochain.
(The astronauts return safely next Monday)

この他、lentement 「ゆっくりと」、tranquillement 「落ち着いて」、prudemment 「慎重に」、normalement 「普通に」などの様態の副詞も ppf 中には生起しない。

- (22) ??L'astronaute *revient* {lentement / tranquillement / prudemment / normalement } sur la Terre lundi prochain.
(The astronaut comes back {slowly / quietly / carefully / normally} to the Earth next Monday.)

だが、全ての様態の副詞が ppf と共起しないわけではない。次の文は ppf として容認される。

- (23) La semaine prochaine, on *voit rapidement* ce qu'on a déjà fait et aborde le chapitre suivant.
(Next week, we see rapidly what we have already done and enter the next chapter.)

副詞 *rapidement* 「急いで」は、事行 *voir-rapidement* 「ざっと見る」と *voir* 「見る」のみで表される事行との対立を生み出す、事行の主要な情報である。これは例えば、複数の事行からなる一連の出来事をまとめて述べるときにも省略されない、事行の骨子となる部分である。これは、*ppf* 中に容認されない様態の副詞が、事行の背景をなす二次的な情報を表すものであるのと異なる。*en sûreté*、*lentement* などの副詞は、実際の状況を知覚していないと分からない様子を表す、その場で見ている主体を要求する表現と言える。*ppf* と共起しない様態の副詞の共通点は、その場性を有するという点である。

これらの表現は、未来形の文中になら問題なく生起する。未来形はその場での知覚を想像して述べる、その場性の表現も可能であるということになる。

(24) L'astronaute *reviendra* {*tranquillement* / *lentement* / *prudemment* / *normalement* } sur la Terre lundi prochain.
(The astronaut will come back {quietly / slowly / carefully / normally} to the Earth next Monday.)

未来形と *ppf* の違いをその場性の有無で捉えることによって、次の例も説明が可能になる。

(25) Venez admirer ça. Je vous *attends*, votre femme et vous, demain matin, vers midi. Je vous { *offrirai* /* *offre* } un cocktail que je { *fabriquerai* /* *fabrique* } moi-même.
(Come to admire that. I wait for you, your wife and you, tomorrow morning, about noon. I {will give / give} you a cocktail that I {will make / make} by myself.)

骨子となる一次的な情報 *attends* 「お待ちする」には *ppf* が用いられ、2文目以降の「自分で作ったカクテルでもてなす」などの、その場に身を置いてからでも決定可能な二次的な情報、より詳細な、その場を想像しての情報には未来形が用いられる。*ppf* が不可能で、未来形でしか表すことのできない文には *éventuellement* 「場合によっては (…するかもしれない)」が生起できる。

(26) Venez admirer ça. Je vous *attends*, votre femme et vous, demain matin, vers midi. Je vous *offrirai éventuellement* un cocktail...
(Come to admire that. I wait for you, your wife and you, tomorrow morning, about noon. I will give you possibly a cocktail...)

ppf は、その場に身を置くことで得られる体験的な知覚情報を表すことができないと言える。詳細な状況描写やその場になって決定されることは、その場に身を置いてはじめて得られる情報であり、その場でのみ得られる情報とは知覚情報に他ならない。ppf は知覚を表さない。

4-3. 事行の内部の視点

我々の問題であった depuis 等と ppf の共起が不可能なわけも、ppf はその場での知覚表現と相容れないということで説明できる。知覚は事行の内部に視点を置いてなされる。depuis も être en train de も事行の内部からの視点を要求する。この点で、これらもその場性の表現であると言える。ppf はこのような視点を許容しない。

depuis が導く時間表現には2つの場合が挙げられる。1つは depuis A jusqu'à B 「A から B まで」のように起点と終結点の両方が明示され、それ自体で完結した時間表現である場合、もう1つは終結点が言語的には示されていないものである。

- (27) depuis 12 heures jusqu'à 20 heures (起点—終結点)
(since 12 :00 a.m. til 8 :00 p.m.)
depuis { 1980 / 30 ans } (起点のみ)
(since {1980 / 30 years})

このうち後者の場合には、明示されていない終結点 t_k が、文脈や発話状況など、発話当事者がすでに共有している情報で補完されることになる。このとき、 t_k に代入することができるのは、発話時 t_0 「今」(1)か、話者の視点が擬似的にずらされて置かれる t_n 「その時」(2)のみである⁶。

- (28) Il habite en France depuis 1980.
=(1) Il habite en France depuis 1980 jusqu'à présent / jusqu'à maintenant.
=(2) Il habite en France depuis 1980 jusqu'alors / jusqu'à ce moment-là.
(He lives in France since 1980.
=(1) He lives in France since 1980 until present / until now.
=(2) He lives in France since 1980 until then / until that moment.)
(29) Il habitait en France depuis 1980 jusqu'alors / jusqu'à ce moment-là.
(He lived in France since 1980 until then / until that moment.)

(1)、(2)のどちらの場合にも現在形が用いられ得る。(1)の場合には「1980年から今まで」という解釈がなされる。(2)は、「その時」に視点を置くことができる文脈であるときにのみ可能で、

「1980年からその時までフランスに住んでいた」という解釈になる。この(2)の場合には現在形ではなく例29のように半過去形を使うことも可能である。

現在形、半過去形は *maintenant* と共起可能である。*maintenant* は視点が置かれている時点を指向する (Vet2005、東郷2010)。これら2つの時制はともに視点を置くことができる時制形態であるということになる。これに対し、単純過去は事行の内部に視点を置くことはできない。

(30) *Maintenant, il { court / courait /* courut }.*
 (Now, he {is running / was running(半過去) / run(単純過去)})

depuis は視点が置ける時制形態である現在形および半過去とは共起可能であるが、視点を置くことができない時制である単純過去とは共起しにくい。

(31)a. *Il { est / était / ?? fut } là depuis deux jours.*
 (He {is / was(半過去) / was(単純過去)} there since two days.)
 b. *Il vécut pendant un an { de 1824 à 1825 /* depuis 1824 } à Bruxelles.*
 (He lived during a year {from 1824 to 1825 / since 1824} in Brussels)

このことは、事行の内部に視点を要求するという意味で、起点だけを伴う *depuis* が *maintenant* と同様の直示的な表現であることを示している。このような *depuis* は、視点の時点の情報で補完されることで意味が決定する、主観的な表現であるという点で、*à partir de ...* や終点が明示された *depuis ...jusqu'à* 等の表現と異なる。事行の内部に視点を置くことを許さない表現方法である *ppf* には、終結点を伴った *depuis* や *de X à Y* などの、完結した客観的な時間表現は適合するが、直示的な用法の *depuis* は生起できない。

(32) *Demain, je reçois des clients {de 14 heures à 16 heures / entre 14 heures et 16 heures / à partir de 14 heures / depuis 14 heures jusqu'à 16 heures /* depuis 14 heures }.*
 (Tomorrow, I receive some clients {from 14 to 16 o'clock / between 14 o'clock and 16 o'clock / from 14 o'clock / since 14 o'clock until 16 o'clock / since 14 o'clock}.)

このほかにも *il y a...que* 「～前から」、*ça fait...que* 「～になる」が導く時間表現なども同様のもの

のと考えることができるが、いずれも ppf 中には出ることができない。これらは事行の内部に視点を置くことを要求する表現であり、その場に視点を置かない事行の述べ方である ppf とは齟齬をきたすためである。

- (33)*Demain midi, {il y a / ça fait } deux heures que je suis à Bruxelles.
(Tomorrow noon, {there is / it takes} two hours to be in Brussels.)

視点が入り込む余地がなければ直示表現は使えない。ppf は視点を置かない述べ方であるため、depuis 等の直示表現を使うことはできないと言える。

être en train de も事行の内部に視点を要求するため、ppf と齟齬をきたす表現の一つである⁷。être en train de は現在形、半過去の未完了アスペクトを取りうる時制形態でしか現れず、単純過去や複合過去などの完了アスペクトの形にはならない。

- (34) Il { est / était /* a été /* fut} en train de courir.
(He {is / was (半過去) / was (複合過去) / was (単純過去)} running)

これはこの表現が、事行を外から見るものではなく、事行内部に視点を取って表していることを示す。この場合の視点とは、事行の内部に抽象的な一点を置きそこを「視点」とするようなものではなく、生身の人間がそこに知覚主体として実際に存在できるようなものでなければならない。実際の人間である知覚主体が内部に想定できない事行の場合には être en train de は使うことができない。次の各文中に être en train de が容認されないのはこのような理由による。

- (35) *La mine est en train d'éclater.
(The mine is bursting.)
(36) *Il est en train d'habiter à Paris.
(He is living in Paris.)
(37) *L'eau est en train de bouillir à 100 degrés.
(The water is boiling at 100 degrees.)

これらはいずれも、内部からの視点を拒むものである。例35の「爆発する」は一瞬に実現される事行を表しているが、その時間が始まりと終わりを分けることができないほど短いため、生身の人間が内部に視点を置くことができない。例36の「パリに住む」は内部に視点を置くことが

十分できる長さの時間を実現される事行であるが、その時間があまりに長期にわたるため、その事行を実際の人間が知覚し続けることは不可能である。つまりそのような知覚主体は存在し得ないことになる。例37の「水は100℃で沸騰する」は事行の抽象的な概念を指し、実際に事行が起きた特定の状況を指してはいない。個々の事例ならば知覚することはできるが、概念そのものを知覚することは不可能である。

この観察から、être en train deはその場で事行を知覚している主体を想定できる文中でなければ生起できないということが言える。ppfの文中にêtre en train deが生起できないのは、ppfが知覚を表さない述べ方であることによる。次の例では、「明日のこの時間」に身を置いている自分を想像し、その状況を表すことのできる未来形のみが可能である。

(38) Demain à cette heure-ci, je {serai /* suis} en train de me dorer à la plage.
(Tomorrow at this time, I {will be / am} getting tanned on the beach.)

Le Goffic et Lab(2001)では depuis や être en train de が ppf 中に生起しないわけを、ppf は事行をひとまとまり en bloc で捉えるものであるからとしている。ひとまとまりとして見るには事行の外からの視点を取らなければならない。中からでは事行の全体を見て取ることはできないからである。本稿のことばでは、ppf は事行の内部から見る視点を取れないということになる。

4-4. ppf は非 t 領域で解釈され知識情報を表す

現在形は、事行の時点に主体を想定する述べ方と、そのような主体を想定しない述べ方の両方が可能である。前者では現在形は知覚の表現と解釈され、後者は知識の表現と解釈される。ここまで見てきたことから、ppf は知覚の表現ではなく、後者の知識の表現であると考えられる。

ここで2つの疑問が起こる。まず、ppf 中の時間表現に関することである。ppf には時の副詞句が共起することが多く、それがなくても事行の生起時点が「未来のある一時点」であることが発話当事者間で了解されていることが多い。これらのことから、ppf が表す事行は、特定の一時空に限定されているように見える。ppf が t 領域で解釈される知覚の表現ではないなら、この時間表現はどのようなものと捉えればよいのか。

もう1つは ppf の領域に関する疑問である。先に見たように、現在形は領域と相対的に解釈されることで、一時空での知覚、またはあるテーマについての知識を表すものとなる。ppf が知識を表すものであるなら、非 t 領域で解釈されているということになる。これを限定するのはテー

マであるが、では ppf の場合には何がテーマとなっているのか。

ppf は、「未来のことを話していること」を既に聞き手が了解していないと正しく解釈されない。Il vient. は時の副詞句がなくとも ppf として「彼は (ex. 今話題になっている、未来に行われる会合に) 来る」との解釈が可能である。しかしこれは、発話状況から切り離された未来のことが話題になっているときに限られ、そうでない場合には「今ここに来る」、または「話題となっている場所に来ている」などと解釈されてしまい、ppf としては解釈されない。

ppf は常にこの「今話題になっている未来の予定」を前提として発話される。つまり大テーマが既に設定済みの状態なのである。例39は2011年の環境保護を訴えるパンフレット中の一文であるが、この文が意味を持つのは「環境保護に関してこれから起きること」という大テーマが既に読み手に了解されているからで、何も話題が共有されていない状態でこの文が発話されれば、2011年の時点から見た「これからの予定を構成する事行」とは解釈されない。例40も同様に「当該の空港に濃霧が与える影響」という大テーマが了解されていなければ、全世界に土曜日に飛ぶ飛行機は一機もないという解釈も可能である。両者が ppf として正しく読まれるのは、「当該のことについての予定」という大テーマが設定され、了解済みだからである。

(39) Le WWF France s'ouvre le 26 mars 2012.

(WWF France opens on 26th March 2012.)

(40) Aucun avion ne vole samedi.

(No plane flies Saturday.)

先行研究の例文には一人称または二人称主語のものが多く、Le Goffic et Lab (2001) の例文は je 主語のものが圧倒的に多い。これらだけを見ていると大テーマの必要性は見えにくい。je 主語の ppf はいきなり発話されても「話者のこれからの予定」という領域がすぐ推測され、この領域内に置かれるべき事行であることが了解されるからである。

テーマが設定する非 t 領域で、個々の時点の差は捨象される。ppf には特定の時点を指す表現は必須ではない。

(41) Ils ont décidé de divorcer. Papa me quitte. Il s'en va et ne revient plus.

(They decided to divorce. Papa leaves me. He goes and doesn't come back again.)

この例は「両親の離婚」が大テーマとして働き非 t 領域を設定する。後続する文が表す事行「パ

パが私と別れる」、「出て行く」、「戻ってこない」はこの非 *t* 領域内にあるものとしてのみ提示される。これらが未来の事行と解釈されるのは、領域を設定する「離婚」そのものが言語外現実でこれから起こるものであるため、領域内に存在する事行も未来のものと了解されるためである。

ppf 中の時の副詞句は、大テーマの下にその事行があるということに付随する二次的な情報を伝えているに過ぎない。ppf は、大テーマ「今後の予定」の下に当該の事行が存在するということを知識として表すものである。

5. おわりに

本稿では、フランス語現在形にはどのような時間性もないとする立場から、ppf の性質の検証を試みた。現在形には、一時空に限られた *t* 領域で解釈され知覚を表すものと、そのような限定のない非 *t* 領域で解釈され知識を表すものがある。ppf は後者の現在形であり、このため、*depuis* のような、一時空に身を置いてのみ可能な「その場性」の表現とは相容れない。その場の状況を想像して述べることでできる未来形と、形態自体では事行の成立のみを述べ、それが「予定」という非 *t* 領域と照らし合わされ解釈されることで、結果的に未来に生起する事行を表すことになる ppf とでは、情報の表し方が全く異なる。

ppf については、ある種のモダリティとも共起しないことが知られている。これは ppf が話者の存在を極限まで背景化した述べ方で、知識の中でも、既に一般に共有されている知識として、事行を表していることによると考えられるが、このことについては紙幅の関係から稿を改めたい。

注

- 1 本稿は2012年9月に京都大学に提出し、2013年3月に学位を授けられた博士論文『フランス語の直説法現在形の意味論』の4章を加筆修正したものである。
- 2 事行とはフランス語学の術語 *procès* の訳で、動詞の表す行為と状態の両方を指す。
- 3 過去時の事行を表す現在形としては、後述の語りの現在 *présent de narration* や、「*Saint Louis meurt en 1270*」 「聖王ルイは1270に崩御する」のような歴史的現在が挙げられる。
- 4 例文にはカッコ内に英語のグロスを併記した。これはフランス語の文構造や時制などをできる限り忠実に置き換えたものであり、英語としては必ずしも自然なものばかりではない。

- 5 Mellet (2000)、Bres (1999, 2005) などによる分類。それぞれ代表的なものとして現在時説 Grevisse (1986)、同時性説 Wilmet (1997)、非時間性説 Serbat (1980) などが、挙げられる。
- 6 depuis のこのような直示的な性質については、古石 (1984) で指摘されている。
- 7 青木 (1987) では、être en train de が特定の occurrence のみを表すものであること、また事行 procès の内部で継続的なものとして捉えるものであることが指摘されている。

参考文献

- BRES J., 1999, « Textualité narrative orale, genres du discours et temps verbal », dans *Le français parlé*. Barbéris (éd.) Montpellier, Université Paul-Valéry-Montpellier 3, 107-133.
- 2005, « Le présent de l'indicatif en français : de quelques problèmes, et peut-être de quelques solutions » in Despierres Cl. et Krazem M. (éd.), *Du présent de l'indicatif*, Dijon, Université de Bourgogne, 27-52.
- GREVISSE, M., 1986, *Le bon usage*, Duculot.
- KLUM, A., 1961, *Verbe et adverbe*, Almqvist & Wiksell, Stockholm.
- LE GOFFIC, P. et LAB, F., 2001, « Le présent *pro futuro* », *Cahiers Chronos* 7, 77-98.
- MELLET, S., 2000, « Chronique de linguistique générale et française XII : le présent », *Travaux de linguistique*, 40, 97-111.
- SERBAT G., 1980, « La place du présent de l'indicatif dans le système des temps », *L'information grammaticale* 7, 36-39.
- TOURATIER, Ch., 1996, *Le système verbal français*, Armand Colin.
- VET, Co., 2005, « L'imparfait : emploi anaphorique et emplois non anaphoriques », *Cahiers Chronos* 14, 33-44.
- VOGELEER, S., 1994b, « Le point de vue et les valeurs des temps verbaux », *Travaux de Linguistique* 29, 39-58.
- WILMET, M., 1997, *Grammaire critique du français*, Hachette-Duculot.
- 青木三郎, 1987, 「現代仏語のアスペクト・テンス・モダリティー—être en train de +inf.と現在形について」, 『フランス語学研究』第21号, 20-35.
- 古石篤子, 1984, 「depuis « déictique » の分析」, 『フランス語学研究』第18号, 1-19
- 樋口万里子, 2007, 「英語の未来表現—認知文法の観点から」, 『認知言語学論考』, No.7, 1-44.
- 東郷雄二, 2010, 「談話情報から見た時制—単純過去と半過去—」, 『フランス語学研究』第44号, 15-32.